Design Seminar
デザインセミナー

特色ある地域のものづくりとデザイン

［期日］2013年10月2日（水）　［会場］ウイング・ウイング高岡5F 503研修室
［モデレーター］桐山 登士樹（富山県総合デザインセンター デザインディレクター）

地域のものづくりにプロダクトデザイナーたちが関わる時、大切にしなければならないことは何か。そして、これからの地場産業はどこに向かい、何を目指していけばいいのか。そのための課題の解決策と、地場産業の特性を活かす将来像を語り合いました。

講師

柴田 文江
Design Studio S 代表

澄川 伸一
澄川伸一デザイン事務所代表

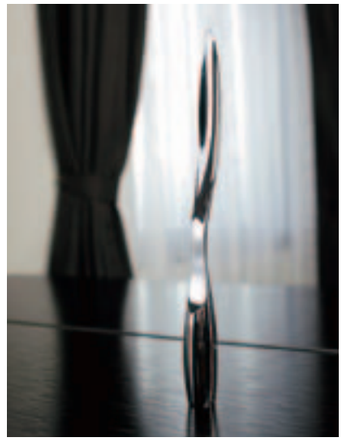
橋田 規子
NORIKO HASHIDA DESING 代表

柴田■新潟県三条市の包丁メーカーや、長野県木曽町の木工メーカーとおもちゃ商品のデザインに取り組んでいます。地域の企業と一緒に仕事をすると、人との関係が深くなる。だから、クライアントが持っているデザイン感や、お互いのフィーリングが合うかが重要。自分の会社のオリジナリティをうまく伝えられるデザイナーをどうやって選ぶか、マッチングは大きな問題です。

橋田■福井の和紙屋さんと取り組んでいますが、和紙そのものが日本人の日常生活から消えつつある。身近に人々の手に触れられる商品が必要だと考え、透かしの柄の和紙をちぎれるようにして、可愛い文房具を作りました。発売からもう10年以上になりますが、売上げよりも、和紙を手で破る行為そのものが、現代ではなかなか出来ず、貴重なこと。この商品を通じて素材の良さや、日本の文化の象徴でもある和紙を広められたように思います。日本感性工学会という学会で「かわいいもの大賞」というコンペに応募したところ、優秀賞をいただきました。

澄川■私と富山との初めての接点は、国の電源地域開発プロジェクトというもので、アルミ製の靴べらを作りました。きっかけは富山の展示会場で見た磨いたアルミの輝きの美しさ。頑張って作ったのですが、富山では高価すぎると大不評。ところが、東京のリビングデザインセンターOZONEに出したところ、売れました。本当に気に入ってくれる人が一人でもいれば、それは商品として成立するのです。地場産業と組むには、やはり人間関係が重要。公的なマッチングプロジェクトは、予算の都合上、一定期間で終わってしまうのが残念です。

「地域のものづくりには時間がかかる。そして商品化に成功しても生産が追い付かないという課題がある」と語るパネラーたちの言葉に参加者も熱心に耳を傾けた



AQUARIUM#003靴べら（デザイン:澄川伸一）

桐山■400年の歴史を持つ高岡銅器を何とかしたいと考えて、KANAYAというプロジェクトをプロデュースしています。産地が抱える問題を解決するには目標設定を明確にしなくてはならないです。補助金に頼るとか甘えの構造から脱却していかないとダメ。特に富山の人はアピールが苦手で、もっとアピールできれば、接点が生まれるはず。日本はデザイナー大国、適材適所でいけば、産地にとってよい環境は作りやすいと思います。

ミラノサローネ 2013フィエラ会場 Vitra社ブース

澄川■富山県、特に高岡市は元気があります。他と違うのは世代交代がうまくいっている点。CADやコンピューターにも前向きで、しかも仲間意識が強くて連携がいい。

橋田■東京からではなく、地方から海外、パリ、ニューヨークやミラノなどの展示会に積極的に参加することはすごく意味があるし、効果がある。世界にはいろいろな価値観があり、自分の価値に合えば、すぐにオファーが来る。そういう機会をどんどん活用してはどうでしょうか。

桐山■ミラノサローネに出展する企業や個人のデザイナーが年々増えています。メゾン・エ・オブジェは来年の2月からシンガポール、5月末にはマイアミで開催されます。それは、シンガポールに出ると、東南アジアの富裕層を抑えられるからです。アメリカ大陸においてはマイアミが南米と北米の中心地として最適です。そういう形で世界は、新しいマーケットに向かっている。世界のトレードショーは日本のものづくりに注目しています。その背景には、日本の食（寿司、ラーメン、低カロリー）が大きな影響を与えています。併せて、日本の産地が丁寧で美しいものづくりを長く続けて来た事も魅力です。今は世界のマーケットに対して攻めていく、良い時期です。

柴田■地方に限らず、商品そのものにどれだけ力があるか、ということだと思います。経験からいいますと、その会社のオリジナリティが強いと、デザイナーも地場産業の仕事として対等にやれる。自分たちのオリジナルのものを自信を持って出していけると思います。

桐山■富山県総合デザインセンター、富山県工業技術センターには3Dプリンターがあるなど、富山県企業は環境的にかなり恵まれています。時代の変化に、富山県もついてきていると思います。ただ、今の仕組みの中では世界のマーケットが求める量を納期までに作れるかというと、そこまでキャパシティがないという問題があります。

澄川■富山の経営者の中には、目利きの方がいて、いいか悪いかを自分で判断して作っています。そういうデザイン的な判断力を持った経営者がもっと増えると、楽しくなると思います。

桐山■ある限定されたものを作っていくこと、ここでしか作れないものを継承することは大事です。量を売っていくことと、特化した商品で守り高めていくことは、それぞれルートが違う。その二軸を持っているというのも、富山県の強さだと思います。そして、世界の著名なブランドの倍以上の歴史を持っているのが、日本のものづくり。これまでは「魅せる」という行為が足りませんでした。「買いたい、欲しい」という欲求につなげ、そのこと自体をブランドにしていく。同時に、やはり、すぐ買えるといったスキーム作りが大切ですね。

橋田■PRする手段など、コミュニケーションのデザインも重要。海外に進出する時は、伝え方もデザインもしていくといいと思います。

柴田■できれば日本の企業と一緒に悩んで、一緒に挑戦する気持ちでお互いが妥協しない仕事ができればいいと思います。本当にこれがいいんだ、と思えるものが作れるような仕組みと、そういう仕事の出来る人を探し続けています。

メゾン・エ・オブジェ 2014

Design Seminar
デザインセミナー

これからの建築と建材

［期日］2014年2月18日（火）　［会場］富山県産業高度化センター 2F会議室
［モデレーター］桐山 登士樹（富山県総合デザインセンター デザインディレクター）

仕切るのではなく「繋ぐ」「見せる」「感じる」空間へ――
軽快な建築（ライトコンストラクション）は現代建築の重要な要素の一つです。
今回は、その最前線で活躍する東京大学大学院教授の千葉学氏と、
「高志の国文学館」の建築で知られるC+Aの東京代表・赤松佳珠子氏を迎えて、
国内外での作品事例や求められる建材等についてご講演いただきました。

講師

千葉 学
東京大学大学院工学系研究科教授
建築家
ちば・まなぶ／1960年東京都生まれ。85年東京大学工学部建築学科卒業。87年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。2001年千葉学建築計画事務所設立。13年より東京大学大学院工学系研究科教授。

赤松 佳珠子
法政大学准教授
建築家
あかまつ・かずこ／1968年東京都生まれ。90年日本女子大学家政学部住居学科卒業後、シーラカンス（のちC+A、CAt）に加わる。2002年よりCAtパートナー。13年より法政大学准教授。

古い素材を再編集して、新しいコンテクストに置き換える

千葉■最初にお話しするのは、千葉県の大多喜町役場を耐震改修・増築した事例です。役場の旧棟は、約50年前に建築家の今井兼次氏（1895～1987）が設計したもので、近代建築運動の真っ最中だった当時を反映した、合理的・機能的なコンクリート造りです。その一方で手仕事的な部分も多く取り入れられ、S字形の梁でキャノピーを支えたり、随所に壁画や金物、趣向を凝らした天井があったりと、とても魅力的な建築です。

それでも普通なら、こんな古い建物は壊されて建て直されるところですが、町は敢えて改修して使う道を選びました。この決断に感銘し、何としてもやりたかった仕事でした。

増築に当たっては、旧棟の後ろに大きな空間を作り、天井からきれいな光が落ちてくる中で、市民がいつも集まれる場所にしようと考えました。そして完成したのが、今井氏の合理性を継承したシンプルな四角い空間で、その天井には二つの方向に梁がかかっています。

町からは、歴史的な町並みが残る地域性との調和も要望されていたので、その点でも、町屋に見られるような天井の小屋組みを現代の目で再解釈した空間を提案できたと思います。

また、化粧梁、ドアの取っ手など、保存されていた建具や素材を再利用することも、改修・増築というコンテクストの中に新たな価値を編集する楽しい作業でした。

シンプルなコンクリートの「L壁」と、メーカーと共同開発した建具からなる宇土小学校校舎

リベラル・アーツ&サイエンス・カレッジ教養学部棟の外壁パネルのライトアップ

キャンパスそのものを、建築の教材に

千葉■私は、設計するときはいつも「人の集まり方をデザインする」ことを考えるのですが、その一例として、工学院大学の創立125周年を記念して建設された総合教育棟（八王子キャンパス）を紹介します。

大学の校舎というと、廊下に沿って講義室や研究室が並ぶのが一般的です。いったん室内に入ってしまえば、外との関わりはなくなってしまう。それを見直したいと思い、L型の建物が4棟寄り添う構成にしました。別棟の教室同士がパサージュ（路地）をはさんで向かい合うことで、学内のさまざまな活動の様子が見えるようになっています。工学院大学では、同じく125周年記念として日本初の建築学部を設立したので、この建物自体が学生の教材になるようにと、構造形式、建具、素材などを適材適所で使い分けました。

また、デザイナーの野老（ところ）朝雄氏と協力して、4棟それぞれに微妙に表情が異なる有孔折板を、日射や視線をコントロールするスクリーンとして取り付けました。

これからも、ありふれた素材を使いながら、新しい関係性を見つけることで、建築の可能性を拡げていきたいと思っています。

サッシメーカーと協力して、コーナーが全開放となるサッシを開発

赤松■くまもとアートポリス・プロジェクトの一つである、宇土（うと）市立宇土小学校の例からご紹介します。

「一本の木の下に、教えたい人と教わりたい人がいる」のが学校の原点と言った先人がいますが、この校舎では「L壁」と呼ぶ部分的な壁をその木に見立てて、周りで子どもたちが学習や活動するイメージを描きました。L壁以外に、ほとんど外壁はありません。床から天井までの建具を開け放つと、爽やかな風が入り、豊かな雑木林の中まですべりこむように学びの場が広がります。

建具は、福井のサッシメーカーと協力して開発しました。コーナーに方立をなくして全開放できるようにする、内外を自由に行き来する子どもたちのために下枠のおさまりをフラットにするなど、こちらからのさまざまなお願いに、熱心に応えていただきました。

国内外のインテリア・プロジェクト

赤松■カタール・ドーハにあるリベラル・アーツ&サイエンス・カレッジの教養学部棟を設計した時は、酷暑の地ですから、太陽の陽射しをどうするかが大きなテーマでした。外壁は、幾何学模様のパターンを施したGRCパネルのダブルウォールになっていて、夜にはライトアップされます。

ルーフも、直射光では強すぎるので、ルーバーで反射させて光を取り入れています。インテリアでは、外壁と同じパターンがトップライトやシェードにも使われています。仕切りに置かれた厚さ30mm、長さ6mのパネルは、真正面に立つと向こうが透けて見えますが、角度がつくと見えなくなります。同国で初めての男女共学大学ということで、ベールのように視線を制御する効果を持たせています。

続いて、国内の事例として、ジャパンファウンデーション（国際交流基金）情報センターのライブラリーを挙げてみます。

この建物自体は石張りの重厚な雰囲気ですが、ライブラリーのスペースはガラス張りで逆光が入ってきます。そのハレーションが印象的だったので、光の中に浮遊する本の森の中にさまよい込んだ感じにしたいと思い、薄い鉄板で組んだシンプルな本棚を製作しました。

また、テキスタイルデザイナーの安東陽子氏によるファブリックと光のランタンが、道路からのアイキャッチになるようにしました。日中は外からの光を活かし、夜はファブリックを通した光を見せるという、美しい空間ができたと思います。

建築家とメーカーが本音で語り合い、高め合う場を

会場から■建築とものづくり、それぞれに携わる人々がもっと協働していくにはどうすればいいでしょうか。

赤松■こちらの希望やアイデアに対して、レスポンスが速く、提案に熱心なメーカーはありがたいものです。富山のメーカーには、得意分野をアピールしてほしいですね。実は建築家サイドも、どうやって、どこまでアプローチしていいかわからない面もあるので、もっと率直にコミュニケーションできる場があればと思います。

千葉■新人の頃は、メーカーの方と打ち合わせをする度に、その豊富な知識と経験に心を打たれました。この人たちが日本の建築を支えているのだと実感しました。今のメーカーも、そうした人材を育てて大切にしてほしい。建材関係の産業が盛んな富山県にも、ぜひ期待したいところです。

桐山■お二人のお話からは、清涼感があり、伸びやかで、気持ちのよさそうな建築を感じました。そして、素材感の大切さ、マスプロダクションで作られる産業としての建材のありかたを考え直すヒントも示唆されたと思います。本日はありがとうございました。

写真上／鉄骨の大梁、H鋼を木でくるんだ小梁など、素材の異なるフレームが縦横無尽に重なりあう大多喜町役場増築棟
Photo:Masao Nishikawa
写真下／建物が折れ曲がって寄り添うことで、他の授業や活動の様子が感じられる工学院大学総合教育棟
Photo:Masao Nishikawa